

変わる心、つながる手

小美玉市 長谷川 絵梨香

わが家は、夫の両親と敷地内別居しています。第一子である娘は、義両親にとっても初孫。生まれたときから義母は何かと気にかけてくれ、抱っこやお世話を率先してくれていました。

ですが、私はそれを素直に喜ぶことができませんでした。「私の子どもなのに」「初めての子育てを自分でちゃんとしたい」と、強く思っていたからです。義母の関わりがありがたい反面、まるで子育てを奪われたような気持ちになってきました。

娘が「ばあばー！」と笑顔で駆け寄るたび、心の中で「私が母親なのに」と複雑な思いが込み上げ、夫に相談しても「そんなふうに思わなくてもいいじゃないか」とあっさり言われ、理解してもらえないことがつらく、夫婦の間にも少しづつ溝ができていきました。

さらに、時期はコロナ禍。外出にも気を使い、友人とも自由に会えず、孤独な育児はますます私を追い詰めていきました。「何をしてもうまくいかない」と感じる日々。周囲から見れば、子育てを手伝ってもらえて恵まれていると思われていたかもしれません、私の心中はなかなか晴れませんでした。

そんな中第二子である息子を妊娠・出産。娘は2歳になる前に姉となり、当然のように赤ちゃん返りが始まりました。私も息子のお世話で手がいっぱいになり、娘にかける時間も心の余裕も少なくなってしまいました。

「どうしたらうまくやれるだろうか」そんな思いが募る中、ふと心に浮かんだのは「頼ってみよう」という気持ちでした。これまで意地を張っていた私ですが、「一度あの頃の気持ちを流してもう一度義母にお願いしてみよう」思い立ち、思い切って「子育てのサポートとケア」を頼んでみました。

義母は「もちろんよ」と笑顔で快く引き受けってくれました。それから、娘が私といたい時は、義母に息子のお世話を、私の手が離せない時は娘をお出かけに連れ出してくれるなど気遣ってくれたおかげで娘にも笑顔が増え、私も心にゆとりが生まれました。

それ以来、義母と子どもたちの関係はより深まり、私と義母の関係も大きく変わりました。これまで「子育てが奪われる」と感じていた義母の存在が「一緒に子どもを育ててくれる心強い存在」へと変わったのです。私自身も「母親としての役割」にこだわり過ぎず、子どもたちの幸せを一緒に願う「チーム」としての家族の形を意識できるようになりました。

最近は義母と子育てや仕事、たまには友人の話まで、何でも気軽に話せる関係になりました。保育園の行事にも一緒に参加し、他の保護者から「旦那さんのお母さんなの！？」「てっきりご自身の親かと思った」と驚かれる程です。子どもたちは週末になると「ばあばと寝たい！」と言い義両親の家にお泊りします。以前の私なら「何で？悔しい」と思っていたはずですが、今はまったく思わずむしろ「ラッキー！お義母さんあとはよろしくお願ひします～」と子どもたちを送り届けてそそくさと自分の家に戻ります（笑）

あの頃の私は、余裕がなくてムキになり、義母に対して突き放すような態度を取っていましたと思います。今振り返れば、助けたいという義母の気持ちに、ちゃんと向き合おうとしていなかったのは私の方だったのかもしれません。

育児は決して一人で背負うものではなく。周囲の人の愛情や手を借りながら、子どもとともに親も成長していくものだと実感しました。この経験を通して、私は「家庭教育とは何か」を考えるようになりました。子どもに何かを教え込むことだけではなく、親や大人たちがどう生き、どのような関わり合いをし、信頼を築き支え合っていくかを見せることも、教育のひとつではないかと思います。自分で抱え込まず、人に頼ること、感謝すること、助け合うこと。それを実際に子どもに見せながら育っていく_____そんな家庭でありたいと願い、これからも子どもたちが愛情に囲まれ安心して成長できるようみんなで協力しながら、

よりよい家庭づくりを目指していきたいです。